

CCES Discussion Paper Series
Center for Research on Contemporary Economic Systems

Graduate School of Economics
Hitotsubashi University

CCES Discussion Paper Series, No.63

March 2016

近代のメトロポリスを定義する
—19 世紀中葉～20 世紀中葉の万国博覧会を手がかりに—

Friedrich Lenger
(Universität Gießen)

訳 森 宜 人
(一橋大学)

Naka 2-1, Kunitachi, Tokyo 186-8601, Japan
Phone: +81-42-580-9076 Fax: +81-42-580-9102
URL: <http://www.econ.hit-u.ac.jp/~cces/index.htm>
E-mail: cces@econ.hit-u.ac.jp

近代のメトロポリスを定義する

—19 世紀中葉～20 世紀中葉の万国博覧会を手がかりに—*

フリードリヒ レンガー[†]

訳 森 宜人[†]

要旨

本稿では、モダニティの普遍的基準と、なかんずくメトロポリスのモダニティが論じられた場としての、19 世紀後半の万国博覧会を取り上げる。とりわけ植民地の人びとの展示によって可視化されたこのような諸基準の問題性とならんで、本稿ではとくに、本来的には教育を目的とする万国博覧会に対して、消費や、文化、そして娯楽の面においてメトロポリス特有のサービスを備えていた開催地が有する独自の意義について問いかける。最後に、19 世紀末より看過し得なくなった万国博覧会の没落を扱う。万国博覧会は、ますます専門特化の進む専門家たちの会議によってその役割が継承されていくようになる一方、オリンピックのような新たな規格によってその機能が部分的に代替されることとなる。

キーワード

万国博覧会、メトロポリス、モダニティ、建築、オリンピック

* 本稿は、2016 年 1 月 21 日に開催された一橋大学現代経済システム研究センター経済史ワークショップでの報告原稿に、脚注をつけるなどの加筆・修正を加えたものであるが、口頭報告の体裁は残している。ワークショップ参加のための旅費を負担してくれた一橋大学と、招聘実務を担当した同僚の森宜人氏、そして非常に有益なコメントを与えてくれたワークショップ参加者に対して深く感謝している。なお本稿の英語版は、若干の改訂を施した上で、*Bulletin of the German Historical Institute (Washington)* 58 (Spring 2016) に掲載予定である。

[†] Prof. Dr. Friedrich Lenger, Historisches Institut, Justus Liebig Universität Gießen
略歴：1957 年生まれ、1985 年博士学位取得（デュッセルドルフ大学）、1999 年ギーセン大学教授、2015 年ライプニッツ賞受賞。

主著：Sozialgeschichte der deutschen Handwerker seit 1800, Frankfurt am Main 1988; Werner Sombart (1863-1941): Eine Biographie, München 1994; Industrielle Revolution und Nationalstaatsgründung, Stuttgart 2003; Metropolen der Moderne. Eine europäische Stadtgeschichte seit 1850, München 2013 など。

[†] 一橋大学大学院経済学研究科准教授（Email: tmori@econ.hit-u.ac.jp）

1. はじめに

本稿では、近代のメトロポリス *modern metropolis* を定義した基準がいかんして現れたのかを分析するとともに、その過程において、とくに万国博覧会が果たした役割について考察する¹。このような基準を確立する上で、真のメトロポリスが中心的な役割を果たす一方、世界都市 *world city*—これは、例えば、帝政期ベルリンの特質だと再三いわれてきたものであるが—には、この基準に応じる十分な能力がある。「《時代に追いつこう》とする強い願望」がモダニティであるとするクリストファー・ベイリー Christopher Bayly の定義に従うならば、万国博覧会が普遍性を求めたのは単なる見せかけではなかった²。万国博覧会によって確立され、万国博覧会と軌を一にして開催された無数の会議で議論された基準は、実際のところ、ヨーロッパとアメリカ合衆国を越えて広く受容された。初期の例をあげるならば、1860年代にイスタンブールとカイロで開催された大規模な博覧会は明らかに、ロンドンとパリで開催された万国博覧会を模倣したものであった³。世紀末に近づくとアメリカ合衆国が支配的な役割を果たすようになったが、19世紀後半の大部分の時期においては、依然として万国博覧会は主にヨーロッパのものであった。1876年のフィラデルフィアや、1889年のパリ、そして独立百周年が祝われた1910年のブエノスアイレスの例にみられるように、国家的な見地からみて重要な百年祭が、実にしばしば大規模な博覧会の契機となった⁴。両大戦間期に入ると万国博覧会は昔日の重みを失い、近代のメトロポリスの基準をめぐる議論は、より専門化された会議や博覧会に継承された。これは19世紀後半より明らかに生じていた動向であったが、その動きがいまやさらに加速化したのである。

この点については、1910年の都市計画〔をめぐる動き〕が好例となる。1910年5月に

¹ この問題についての優れたサーヴェイとしては、Emily S. Rosenberg, “Transnationale Strömungen in einer Welt, die zusammenrückt”, in: ders. (Hg.), *1870-1945. Weltmärkte und Weltkriege*, (=Geschichte der Welt, eds. Akira Iriye/Jürgen Osterhammel, vol. 5) Munich: C.H. Beck 2012, S 815-998, besonders S. 889-906 がある。また本稿の記述は、主に次の2つの論稿を基礎にしている。Friedrich Lenger, *Metropolen der Modernen. Eine europäische Stadtgeschichte seit 1850*, Munich: C.H. Beck 2013 (an English translation of the first part has appeared as id., *European Cities in the modern era, 1850-1914*, Leiden/Boston: Brill 2012) und ders., “Metropolenkonkurrenz. Die Weltausstellungen in der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts”, in: *Journal of Modern European History*, XI (2013/3), S. 329-350.

² Christopher Bayly, *The Birth of the Modern World 1780-1914*, Oxford: Blackwell 2004, p. 10.

³ Cf. Rosenberg, “Transnationale Strömungen”, S. 893.

⁴ この点については例えば、Kerstin Lange, *Tango in Paris und Berlin. Eine transnationale Geschichte der Metropolenkultur um 1900*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 2015, S. 11 を参照。

ベルリンで世界都市計画博覧会が開催された折、少なからぬ来訪者が、それ以前に、ウィーンで開催された第9回国際住宅会議にも訪れていた。同様に、同年の9月と10月、デュッセルドルフで開催された国際都市計画博覧会の来訪者のなかには、ロンドンのロイヤルアカデミーで開催されていた類似の催しにも足をのぼしていた。両都市では、ダニエル・H・バーナム Daniel H. Burnham とエドワード・H・ベネット Edward H. Benett によって出版された1909年シカゴ計画に寄せられた、ジュール・ゲラン Jules Guérin のオリジナル・スケッチが大好評を博した⁵。同じく、大ベルリン・コンペ〔訳注：ベルリン市を中核とする大ベルリン圏の将来構想を検討するために、ベルリンの建築家協会が実施した地域計画コンペ〕に出展された展示品は、ボストンをはじめとする北米都市でも展示され、議論の対象となった。1850/60年代の万国博覧会に組み入れられた一例えば、そこでは労働諸階級向けモデル住宅が展示された一が、いまや、大西洋をまたぐ熱心な対話のなかで展開される専門家たちの議論に委ねられることとなったのだ。

以下では、いくつかの重要な万国博覧会が開催された地への小旅行にあなた方をいざないたい。ただ、時間的制約のため、1880年代後半と1920年代後半にバルセロナで組織された2度の万国博覧会—これらは、1992年に開催されたオリンピックと相俟って、バルセロナをヨーロッパで最も魅力あふれる都市の1つにしたのだが—といったような、多くの魅力的な博覧会や都市については別の機会にゆずることとなるので、この小旅行はせいぜいアペタイザーとなるにすぎない。その代り、ロンドンとパリで開催された最初期の万国博覧会から話を始めたい。これらが、近代のメトロポリスを定義する上で有している重要性は、まったく疑い得ない。次いで後半では、19世紀後半に開催された2つの万国博覧会に移る。両博覧会は依然として、1896年に、ゲオルク・ジンメル Georg Simmel がベルリン産業博覧会を訪れた折に、手短にまとめた特徴を示していた。すなわち、「つかの間とはいえ、世界文明の中心を形成し、あたかも一幅の絵画のように、限られた空間に世界中から様々な創作品を集めていることこそが、なかんずく万国博覧会の魅力だ」⁶。こんにち、これはもはや当てはまらない。もし、ミラノ万博が約3ヶ月前に閉幕したことをあなた方の多くが知っているとしたら、それは私にとって驚きだ。本稿を結ぶにあたっては、現在

⁵ Cf. Christiane Crasemann Collins, *Werner Hegemann and the Search for Universal Urbanism*, New York: W.W. Norton 2005, pp. 45-56 and Daniel T. Rodgers, *Atlantic Crossings. Social Politics in a Progressive Age*, Cambridge, MA: Harvard UP 1998, pp. 160-208.

⁶ Alexander C.T. Geppert, *Fleeting Cities. Imperial Expositions in Fin-de-Siècle Europe*, Basingstoke: palgrave macmillan 2010, p. 327 より引用。

にいたるまでのストーリーを描写するよりは、むしろ、1937年にパリで開催された最後の大規模な万国博覧会の後に生じた展開をみることにしよう。

2. ロンドン（1851年）からウィーン（1873年）を經由してパリ（1855/67年）へ

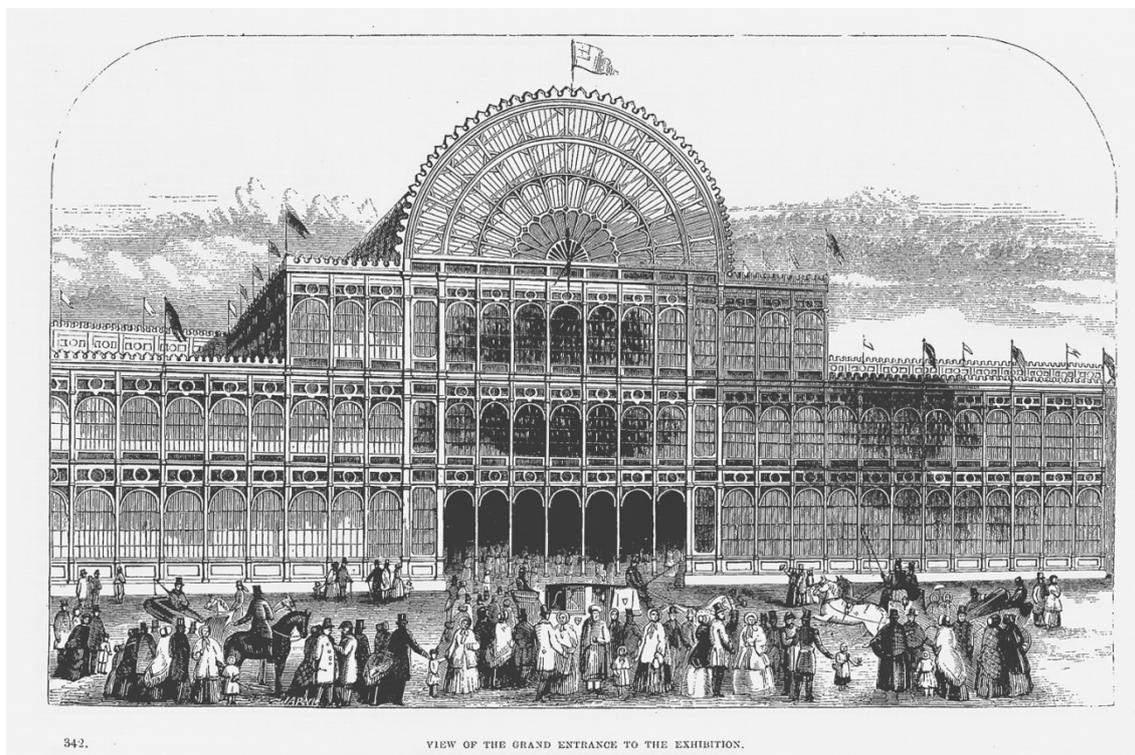
マルクスとエンゲルスは、1851年にロンドンで開催された「全諸国の産業成果の大博覧会」The Great Exhibition of Works of Industry of All Nations〔訳注：同博覧会の正式名称については、重富公生「1851年ロンドン万博と製造業利害—『バーミンガム問題』を中心に—」『神戸大学経済学研究年報』50巻（2003年）、1-14頁の訳語にならった〕—最初の万国博覧会として一般に認められている—の計画について論評を加えた際、ジンメルほど寛大ではなかった。両人は、この博覧会を、「現在の工業が、いたるところで国境線を制圧していることの決定的な証明」として解釈した。そうした観点より、産業製品の展示は、世界中の国々が、「自分の時間をどのように利用してきか」を示すこととなる「大きな試験」のごときのものであった⁷。こんにちのわれわれにとっては、幾分、怒りを覚えるような展示方法であったとはいえ、マルクスとエンゲルスが言及した、普遍的発展の基準としての生産諸力は、手にとるようになった。多くの点で、ジョセフ・パクストン Joseph Paxton の設計した巨大な水晶宮 Crystal Palace そのものが、最も大きな感銘を与える印象深い工業製品であった。何千もの同種の素材によって築き上げられた水晶宮は、最新の機械設備なしでは建設不可能だったであろうことを物語っており、博覧会閉幕後も、解体され、市内の別の場所において、商業的アミューズメント・センターとして再建されることもなかったであろう。しかしながら、ゲオルク・ジンメルは1896年に、博覧会の建築物は無常を強調するものと述べたが、恐らく彼の念頭には水晶宮の存在があったのであろう。

「博覧会の建築物には無常性が明瞭に刻印されているがゆえに、それは脆弱な印象をまったく与えない」⁸。その上、主要な建築素材—鉄とガラス—はその当時、第一に鉄道駅—そ

⁷ Friedrich Engels/Karl Marx, “Revue. Mai bis Oktober (1850)”, in: id., *Werke*, vol. 7, Berlin: Dietz 1960, S. 421-463, hier S. 430f. 訳注：引用部分については、マルクス=エンゲルス（石堂清倫訳）「評論 1850年5-10月」ドイツ社会主義統一党中央委員会附属マルクス=レーニン主義研究所編集（大内兵衛・細川嘉六監訳）『マルクス=エンゲルス全集 第7巻』大月書店、1961年、440-441頁の訳文を利用したが、引用に合わせて一部改変を施した。

⁸ Georg Simmel, “Berliner Gewerbe-Ausstellung (25.7.1896)”, in: id., *Miszellen, Glossen, Stellungnahmen, Umfrageantworten, Leserbrief, Diskussionsbeiträge 1889-1918*, (=Gesamtausgabe, vol. 17) Frankfurt a.M.: Suhrkamp 2004, S. 33-38, hier S. 36.

図1 1851年ロンドン万博の水晶宮前景



出典) 国立国会図書館ホームページ「博覧会—近代技術の展示場」より転載。

れ自体、近代の象徴である一の建設を想起させた。

600万人以上の来訪者を数えたロンドンでの興行の吸引力はたしかに、主に水晶宮という建築に負っていた。週に1度は1シリングで入場できたため、労働者階級上層の人びとも含む、社会的に多様な群衆を万博会場に引き寄せた。旅行代理店が、イングランド中で万博会場を訪れるツアーを企画したため、これをもってマス・ツーリズムの幕が開けたといってもよかろう。これら来訪者の多くにとっては一約4万人と推計される外国人の数は限定的であったものの一、初めてのロンドンへの旅となった。そして、19世紀中葉の世界最大都市であったロンドンも、大英博物館の開館時間を延長したり、ナショナルギャラリーの夏休みを繰下げたりするなどして、その魅力に磨きをかけるのに熱心であった。マダム・タッソーろう人形館や、動物園、初期のミュージックホールといった、より商業的な施設についてはいうまでもない。同時代人の議論は、アルバート公を中心とする博覧会企画者が有していた真剣で教育的意図と、多くの訪問者たちの娯楽と消費に対する需要との間を走る、暗示されていた亀裂を反映することとなった。しばらくすると、このような見解の相違は、水晶宮の将来をめぐる論争において具現化された。アルバート公が、万博の

財政的余剰を、サウスケンジントンの万博跡地の教育施設に回す道筋をつけるのに成功した一方、商業と娯楽はシドナムに移された。シドナムでは水晶宮が再建されたが、その名称「大衆の宮殿」は、商業と娯楽こそが大衆の求めていたものであったことを強調している⁹。教育と娯楽をめぐる相違は、その後の万国博覧会で繰り返されることとなるものの1つであった。しかしながら、商業と娯楽の支配的な役割を嘆いていた人びとは、たいていの場合、次のことに無自覚であった。すなわち、均一化された消費者大衆に向かって語りかけることが、労働者階級を遠ざけたり、女性を別のパビリオンに追いやったり、また非白人の人びとをコロニアルな対象として扱ったりすることを通じて、博覧会が調和を試みた不平等を隠ぺいする手助けになるということである。

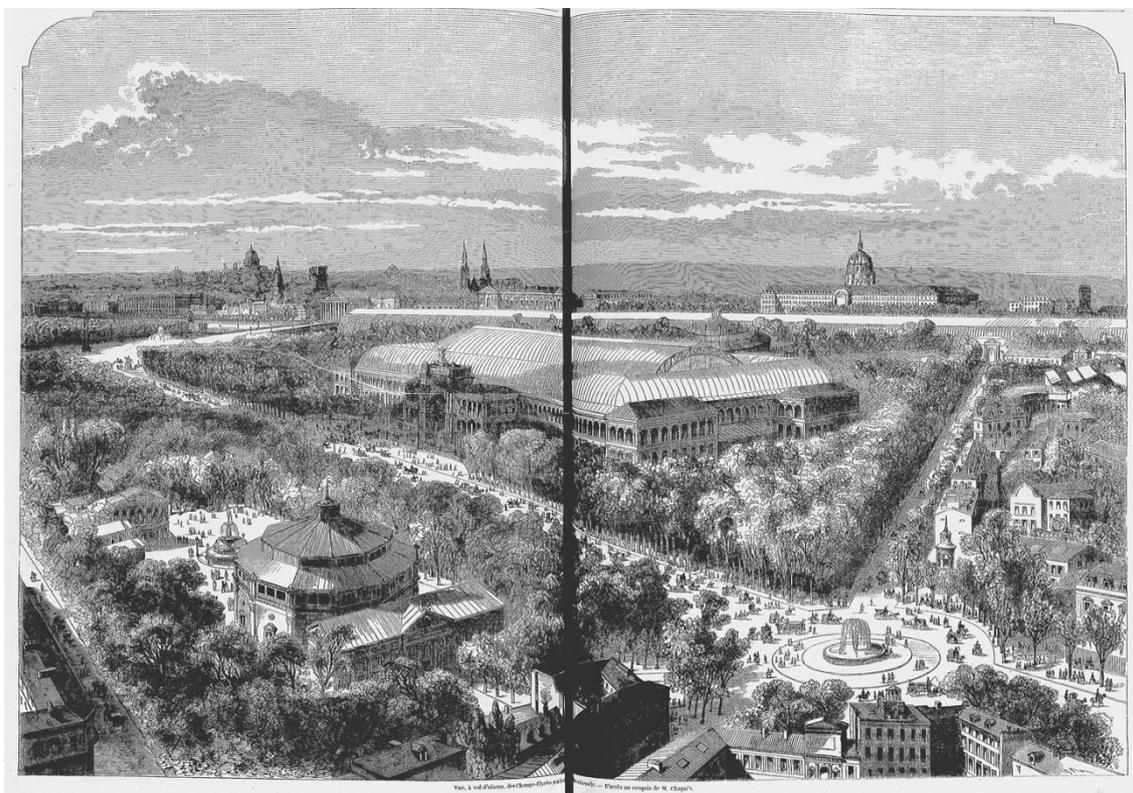
図2 1851年ロンドン万博の水晶宮内部



出典) 国立国会図書館ホームページ「博覧会—近代技術の展示場」より転載。

⁹ この点についての二次文献は、Lenger, *Metropolen*, S. 29-34 にあげられている。

図3 1855年パリ万博の会場鳥瞰図



出典) 国立国会図書館ホームページ「博覧会—近代技術の展示場」より転載。

1851年のロンドン万博では、いまだある1つのことが前面にでなかった。すなわち、それは都市それ自体のモダニティを意識的に展示することである。この点において、1850/60年代のパリ万博は、すくなくとも新たな特質をもたらした。それは、この年代のパリ万博が、ナポレオン3世とジョルジュ・オスマン Georges Haussmann 主導下でのパリ改造と同じ時期に—というよりは、むしろその一部として—開催されたためである。同時代人たちは、この関係を見逃さなかった。フランツ・ルーロー Franz Reuleaux は1867年に、「パリ万博について語る際、パリがいかにして自身を展示しようとしたのかについて思い出す必要がある」¹⁰、と指摘している。この関係は、さまざまなレベルにおいて見出すことができる。第1に、人的な結合である。オスマンは、1867年万博の準備に責任を負う王立委員会のメンバーであり、また、万博会場の整地の責任を負ったジャン・シャルル・アドルフ・アルファン Jean-Charles-Adolphe Alphand のような、オスマンの親しい協力者たちも万博

¹⁰ Volker Barth, *Mensch versus Welt. Die Pariser Weltausstellung von 1867*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 2007, S. 376 より引用。

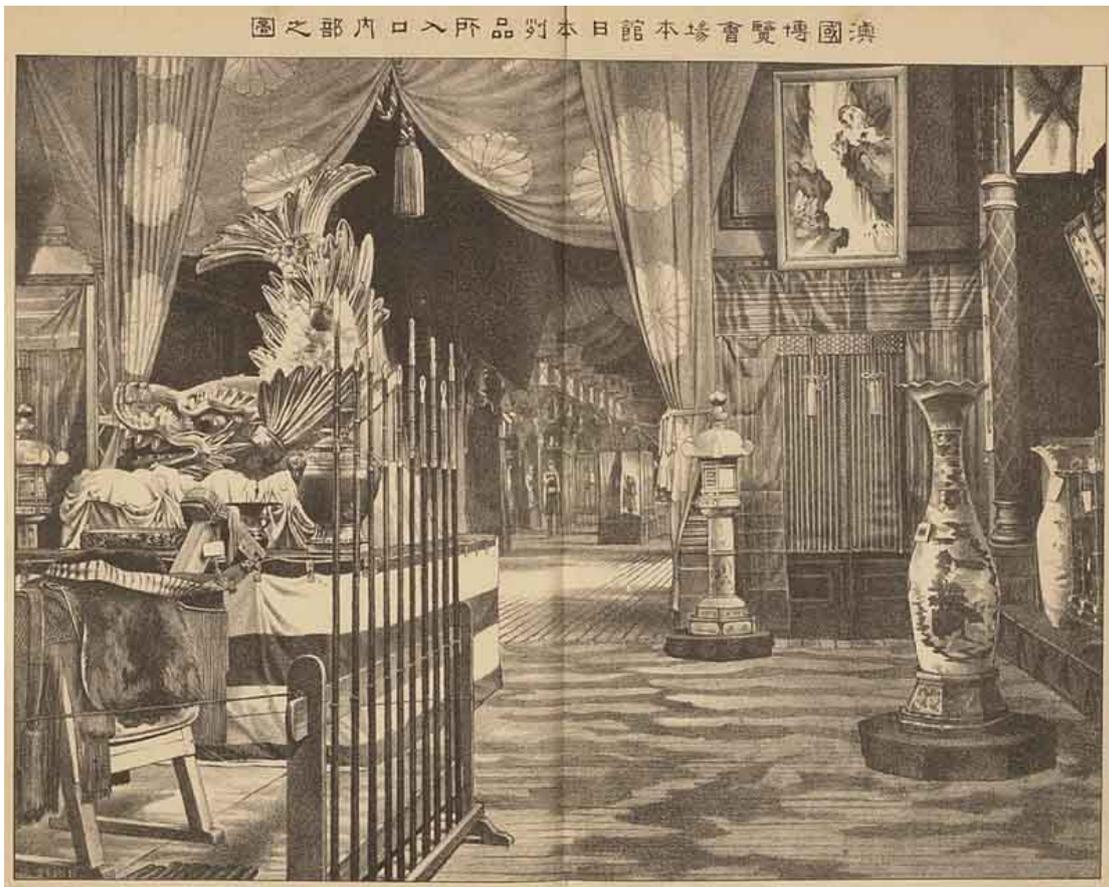
の準備に携わった。次いで、シャンゼリゼ通りに産業館という最も有名な建物が建てられた 1855 年には、すでに空間的な関係もみられるようになっていた。そして最後に、多くのイノベーションのタイミングが効果的であった。ビュット・ショーモン公園の開園や、国立図書館の閲覧室の開室は、万国博覧会の正式な開幕日に合わせて行われた。同様のことが新オペラ座についても計画されたが、期限内に工事が終わらなかった。

同様に、旅行者をセヌ川の各所に運ぶ船が導入されるとともに、市内の物流と人の流れを促進しようとするオスマンの計画の基軸をなす、乗合馬車システムの新しい路線の運行が始まった。オスマンが築いた大通りも、以前は建物が密集していた街区に新たな幹線を形成するとともに、新たに舗装された幅員の広い車路と歩道を分離させることによって、市内の物流と人の流れの促進に寄与した。1867 年初頭には、すでにラ・ヴィレットの中央食肉処理場が完成していた一方、同年後半には、ベルグランの上水システムが遠くシャンパーニュ地方からパリの家庭に清潔な飲料水を供給するようになった。初期の住宅改良運動のスローガンより多くの光を、より多くの空気を一にみられたように、疾病はミアズマ、すなわち危険な蒸発作用によってもたらされるのであり、それを避けるには都市空間の排水設備を整えるのが最善である、と同時代人たちは信じていた。それゆえ、都市内への清潔な水の供給よりも、排水の方がはるかに重要であった。ロンドンと同じくパリは 19 世紀前半に再三、コレラの犠牲となっていた。そのため、近代的な下水システムが来訪者の間で最大の称賛の的になったことは、驚くに値しない。1867 年万博の会期中に催され、人気を博した地下下水道網を小船でめぐって見学するツアーの参加者のなかには、アレクサンドル 2 世とヴィルヘルム 1 世もいた。当時のパリの下水道に流されていたのは、雨水と生活排水だけで、汚水溜めを代替することはいまだ企図されていなかったことがわかれば、このような企画が実施されたことも理解しやすいであろう。オスマンが追及した目的のなかでは、公園の造園による都市の衛生と健康の増進もまたとくに重要な役割を担っていた。オスマン自身は公園を「緑の肺」と呼び、そのなかの 1 つ—ヴァンセンヌの森—はのちに、1900 年に開催された第 2 回近代オリンピックの会場となった。

1867 年のパリは、19 世紀の第 4 四半世紀に人びとが近代のメトロポリスに対して、当然のものとして期待するようになったことの大部分を提供した。パリは、他の多くの都市より健康的であった。マルセイユや、ハンブルク、キエフ、ナポリのように、コレラに悩まされていた諸都市は 1880/1890 年代に入ってもなお有効な下水システムを備えておらず、キエフとナポリでは第 1 次大戦前夜にいたるまでそうした状況であった。その上、パリで

は比較的時間をかけずに移動をすることができた。1850年代後半、1年間に乗合馬車1台あたりで100万回以上の乗降数を数えた。このことは、少なくとも富裕なパリジャンはきわめて頻りに乗合馬車を利用していたことを示唆している。しかし、近代のメトロポリスは、健康的で、早く移動できるというだけでなく、綿密に計画されていることも期待されていた。そしてまた、この点においてもパリによって基準が設定された、とライバルたちは称賛した。例えば、イギリスの『ビルダー The Builder』誌は、1867年万博が開催される数ヶ月前に、「英国の首都は、道路と公共空間における建築の外見全般において、フランスの首都に大きく後れを取っている」、と指摘した¹¹。

図4 1873年ウィーン万博の日本館内部



出典) 国立国会図書館ホームページ「世界のなかのニッポン」より転載。

¹¹ Tristram Hunt, *Building Jerusalem. The Rise and Fall of the Victorian City*, London: Phoenix 2005, p. 311 より引用。オスマン期および1867年万博会期中のパリについての二次文献は、Lenger, *Metropolen*, S. 34-49 に挙げられている。

こうした観点から少しでもパリに比肩し得る都市があったとするならば、それはウィーンだ。そして、それがなぜかと問うことは意義深い。ウィーン中心部の改造は、多くの同時代人たちが賞賛するような統一性を得ることができたのは、皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世が 1857 年後半に、市壁および防備施設の解体を命じただけでなく、その所有権が自身に帰することを主張したればこそであった¹²。少し単純化すれば、19 世紀ヨーロッパに特有の広範な所有権を考慮すると、大規模な都市計画を実現させるには、広大な収用権を伴うボナパルティズム的支配、ないしは新絶対主義的支配が必要であったと結論づけることができよう。したがって、都市衛生の点において、パリは 1914 年までにいくつかのドイツ都市に凌駕されたかもしれないが、また、都市の公園整備ということになると、アメリカ諸都市は再三パリを出し抜くこととなったが、両大戦間期に統一的な都市景観を高く評価する人びとにとってパリは依然として驚嘆の的であったということは、われわれにとって驚きではなかろう¹³。そして、オスマン主導下で行われたパリ改造の財源を捻出するための負債の返済にも同じだけ長い時間がかかり、両大戦間期にようやく完済された。

都市計画の点での類似性のほかに、ウィーンとパリは、ともに万博開催地としての経験を共有した。しかしながら、1873 年のウィーン万博は、同年の大不況および深刻なコレラ流行と重なったために、不幸なイベントとなった。そのため、数百万グルデンにもものぼる赤字を除くと、プラーター公園が、同万博のほぼ唯一の遺産となった。プラーター公園は、こんにちにいたるまで、広く知られたアミューズメント・パークを代表している¹⁴。しかしながら、これがオーストリア・ヨーロッパ的な一方的な見方であるというのはもっともだ。日本人の観点からすると、恐らく、維新後の明治日本が参加した初めての万国博覧会であったことの方が、より注目に値するであろう。すでに 1867 年には、日本の美術品と工芸品は、ジャポニズムの誕生がみられた点において、世界中の人びとを魅了していた。したがって、1868 年に日本のある新聞が、「さて日本もこの博覧会にて、七大国のうちの数にいたり」¹⁵、と書き立てたのも、故なきことではない。

¹² Cf. Thomas Hall, *Planning Europe's Capital Cities. Aspects of Nineteenth Century Urban Development*, London: Routledge 2009, chapt. 10 and 11.

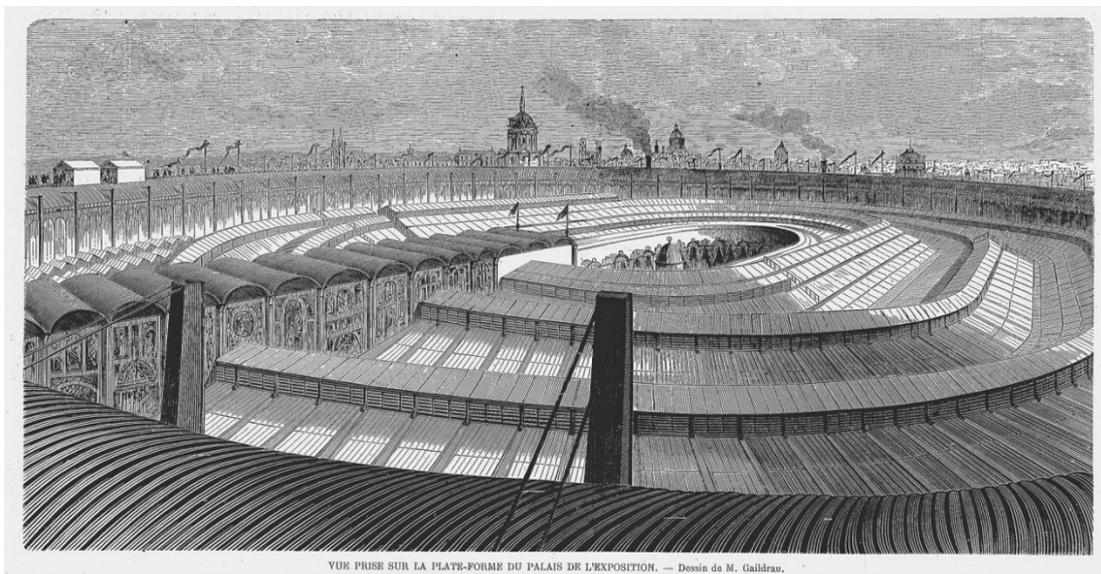
¹³ Cf. Friedrich Lenger, "Großstädtische Eliten vor den Problemen der Urbanisierung. Skizze eines deutsch-amerikanischen Vergleichs", in: *Geschichte und Gesellschaft XXI* (1995), S. 313-337.

¹⁴ Cf. Wolfgang Maderthaner, "Von der Zeit um 1860 bis 1945", in: Peter Csendes/Ferdinand Opll (Hg.), *Wien. Geschichte einer Stadt*, vol. 3, Vienna: Böhlau 2006, S. 175-544, besonders. S. 201ff.

¹⁵ Daniel Hedinger, *Im Wettstreit mit dem Westen. Japans Zeitalter der Ausstellungen*

最後に再び 1867 年のパリ万博に目を転じると、娯楽と消費に関して、1100 万人の来訪者が期待し得たことが、いかなるものであったのかがわかる。45 万平方メートル以上に及ぶ広大な万博会場では、会場上空にあげられた気球への試乗や、各国のパビリオンで出された伝統料理、「中国の巨人・詹」Chang the Chinese giant のような万博特有の見世物のような娯楽の提供が、メイン会場の責任者フレデリック・ル・プレー Frederick Le Play の教育的意図と競合した。万博を組織する上での基本方針は、マルクスとエンゲルスがロンドン万博のエッセンスであると認識した、普遍的な競争原理を魅力的に具現化することであった。ル・プレーは、右ないし左に曲がると、来訪者は別の〔ジャンルの〕製品の回廊に入ることとなるが、その出展国は変わらないというように、類似した展示物を同心円状に配置しようとした。部分的にしか実現されなかったものの、この方針によって、国単位の〔扇形の〕スライスによって構成される巨大なケーキが出来上がり、「文明化と一般的進歩に関する観察者の物差しのなかで、どのような位置を〔それらの展示物が〕占めているのか」を特定するのが容易なこととなった¹⁶。

図 5 1867 年パリ万博のメイン会場外観

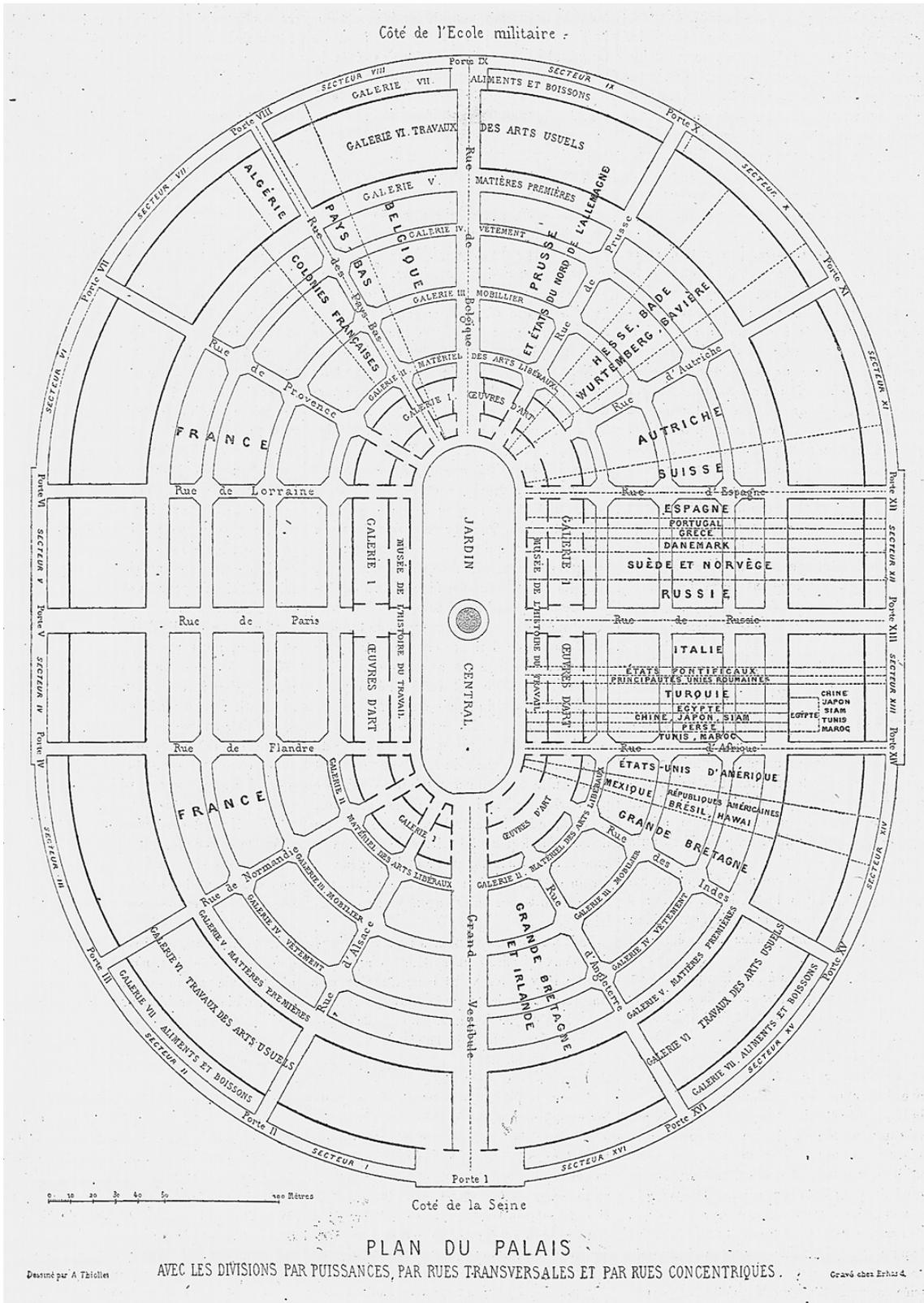


出典) 国立国会図書館ホームページ「博覧会—近代技術の展示場」より転載。

1854-1941, Frankfurt a.M.: Campus 2011, S. 59 より引用。訳注：この記事は、1868（慶應 4）年 5 月 2 日『神奈川新報もしほ草』より引用されたものである。訳出にあたっては、中山泰昌（編）『新聞集成明治編年史 第 1 巻・維新大変革期』新聞集成明治編年史頒布会、第 2 版、1965 年、82 頁を参考にしたが、旧字体を新字体に改めた。

¹⁶ Barth, *Mensch*, S. 165; cf. *ibid.*, *passim*.

図6 1867年パリ万博のメイン会場平面図



出典) 国立国会図書館ホームページ「博覧会—近代技術の展示場」より転載。

ル・プレーの啓蒙的な意図が娯楽と消費を求める来訪者の要求に対して、敗北を喫したのはもっともなことだ。早くも 1867 年 7 月には、「不成功に終わった施設は、いずれもレストランに変わった」¹⁷、とある報告が記述している。より当然の帰結は、来訪者がたびたび博覧会場を離れる必要がないように会場内の物とサービスを充実させようとしたル・プレーの意図が幻想に終わったという事実であった。その代りとして、少なくとも前回の万博に匹敵するほど、パリ自体が再びアトラクションとなった。来訪者のほとんど一例えば、トーマス・クックがパイシーPaissy に建てた施設に滞在した 1 万 2000 人の英国人—は博覧会場から遠く離れた場所に宿泊し、市内のありとあらゆるレストランや劇場を訪れた。市内の複数の博物館の入場料は無料となり、また、都市的光景の近代化における非常に重要な要素となっていた百貨店は、商品券を用いて互いに顧客を奪い合った。多くの来訪者にとって、〔博覧会場に〕姿をみせた多数の君主たちは、パリの街や博覧会に劣らず魅力的であった。君主たちが、現代の著名人と同様の扱いを受けたことは、ジークフリート・クラカウアーSiegfried Kracauer によって紹介されたアネクドートが示唆している。そのアネクドートとは、こうだ。ジャック・オッフエンバック Jacques Offenbach のオペレッタ「ジェルロスタン大公女 Grandduchess of Gerlostein」の主演を演じたオルタンス・シュネゲール Hortense Schneider が博覧会の入り口に馬車で乗りつけた。博覧会場に馬車で乗り入れることができるのは皇族・王族だけであると言われると、彼女は、「どきなさい！わたしはジェルロスタン大公女です」、と言って、まんまと馬車で入場することができたのである¹⁸。

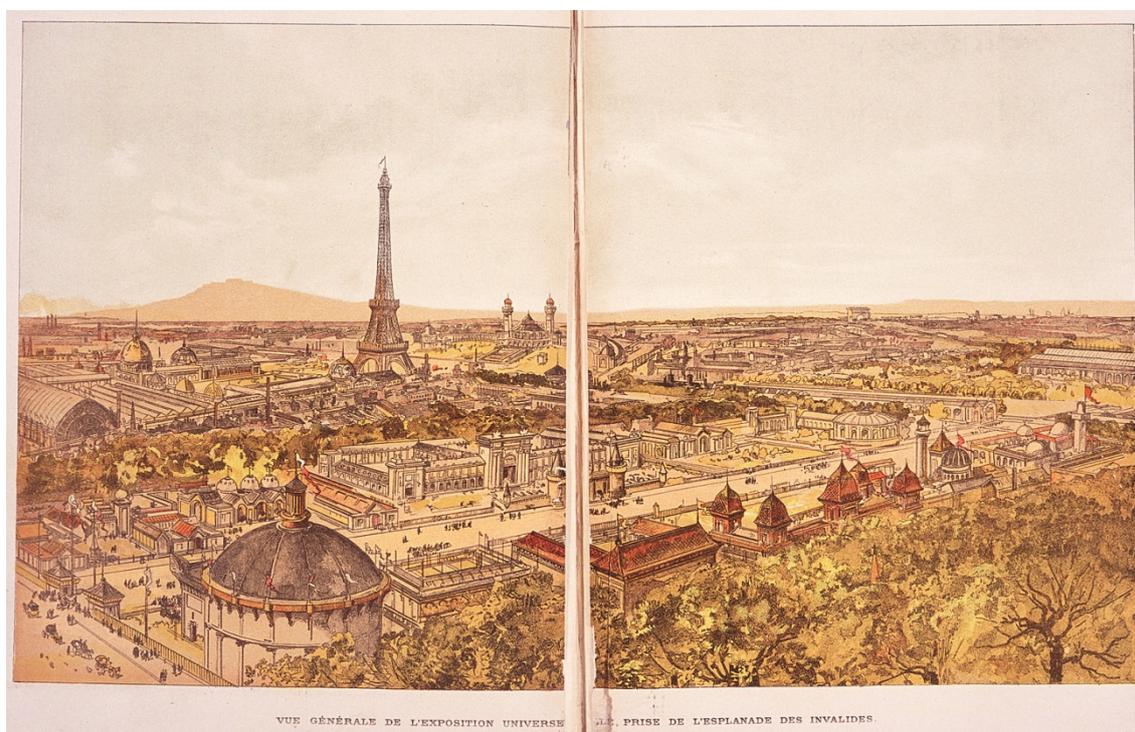
3. パリ（1889 年）からシカゴ（1893 年）へ

のちに開催された万国博覧会は、明らかにロンドンとパリで開催された初期の万博と多くの基本的特徴を共有していた。そして、この連続性の一部は、以前に開催されたすべての万博を凌駕したいという向上心であった。1893 年にシカゴで開催された世界コロンブス博覧会 World's Columbian Exposition の来訪者数 2750 万人は、その 4 年前に開催されたパリ万博に及ばなかったものの、敷地面積 686 エーカーのホワイト・シティ White City は、

¹⁷ Ibid., S. 346.より引用。

¹⁸ Siegfried Kracauer, *Jacques Offenbach und das Paris seiner Zeit*, (=Werke, vol. 8) Frankfurt a.M.: Suhrkamp 2005, S. 278. 訳注：この場面の訳出にあたっては、ジークフリート・クラカウアー（平井正訳）『天国と地獄』ちくま学芸文庫、1995 年、437-438 頁を参考にしたが、描写の細部については原文にもとづき、一部改変を施している。

図7 1889年パリ万博の会場鳥瞰図



出典) 国立国会図書館ホームページ「博覧会—近代技術の展示場」より転載。

少なくとも〔パリ万博の会場面積〕をはるかに凌ぐと主張することができた¹⁹。しかし、同時代人のなかには、〔万国博覧会の〕形式はすでに頂点を過ぎてしまったかのように思う者もあった。例えば、ブレーメン商業会議所の代表として1889年のパリ万博を訪れ、また1904年のセント・ルイス万博ではドイツ派遣団の一員として学術会議で登壇したヴェルナー・ゾンバルト Werner Sombart は、1908年には次のように懐古している。「近代文化のシンボル—エッフェル塔—が建設され、〔フランス革命百周年を〕記念する万博によって真に比類なき壮麗なイベントが実現された1889年に、あらゆる点において万国博覧会は終わりを迎えたかのように思われた」²⁰。アメリカの博覧会に対して公正な態度で接することは、ほとんどゾンバルトに期待しえないことであったが、エッフェル塔についての彼の言及は、

¹⁹ Cf. Arnold Lewis, *An Early Encounter with Tomorrow. Europeans, Chicago's Loop, and the World's Columbian Exposition*, Urbana, IL: University of Illinois Press 1997, p. 168 and Astrid Böger, *Envisioning the Nation. The Early American World's Fairs and the Formation of Culture*, Frankfurt a.M.: Campus 2010, p. 117.

²⁰ Cf. Werner Sombart, "Die Ausstellung", in: *Der Morgen. Wochenschrift für deutsche Kultur*, IX (February 28th, 1908), S. 249-256, hier, S. 254.

ある程度の重みを持っていた²¹。水晶宮以来、これに匹敵するほど力強く機械の時代を象徴する建造物は建てられたことがなかったのだ。

エッフェル塔は、工学技術の祝典として迎えられたが、政治的には論争の対象となることがわかった。フランス国内では、カトリック系の論評が、新たなバベルの塔のファルスの骸骨としてエッフェル塔を批判したのに対して、エッフェル塔の建設に協力した人びとは、サクレクール寺院の筆舌に尽くしがたい悲哀さの対極にあるものとしてエッフェル塔を位置づけることを躊躇しなかった。サクレクール寺院の存在が、革命的なパリ・コミューンに対する宗教的かつ保守的な反応であったため、エッフェル塔がフランス革命の遺産をめぐる論争の中心に位置づけられたことは明らかであった²²。万国博覧会と革命百年祭の結びつきは、オーストリア=ハンガリーやイタリアと同様に、イギリス、ロシア、そしてドイツがこの万博への参加を見送った理由ともなった。ただ、オーストリア=ハンガリーとイタリアは、膨大な費用を不参加の理由とした²³。それにもかかわらず、万博は明白な大成功を収めた。そしてそれは、人びとが万国博覧会に期待するようになっていたものを、この万博が受け継いでいたからである。例えば、広大かつ印象的な機械館や、鉄とガラスの利用を通じて建築と工学の密接な関係を証明した複数の建物などだ。

1889年の万国博覧会がそれ以前のものと同趣を異にした点は、とりわけ植民地関係の展示に充てられた空間である。植民地関係のセクションはすでに1855年から万国博覧会に内包されていたが、1889年には独自のスペースを占めるようになっただけでなく、セーヌ川左岸のケ・ドルセ Quai d'Orsay 沿いで行われた、あらゆる文化や時代の人びとの住居に関する展示と結合されたのだ。この展示では、建築史は扱われず、「白人」のために残しておかれたが、他方で、植民地の人びとは、似通ったロジックに従って演出された。ベアット・ヴィース Beat Wyss が、「技術的進歩の成果と、慣習的な居住様式や、トウモロコシをすりつぶす様子、木材彫刻、そして踊りなどを通じて展示された植民地支配の対象者とを対比させる、植民をする側の支配力」の展示について語ったのは当然であった。彼はさらに、「エッフェル塔は、カナカ人やセネガル人など黒人たちの質素な小屋を圧倒する、ヨーロッパ

²¹ Cf. Friedrich Lenger, *Werner Sombart (1863-1941). Eine Biographie*, München: C.H. Beck 1994 (3. Aufl. 2012), Kapitel 7.

²² Lenger, “Metropolenkonkurrenz”, S. 342f.を参照。同頁にこの点についての二次文献が挙げられている。

²³ Cf. Geppert, *Fleeting Cities*, p. 68.

人の優位を象徴していた」²⁴、と続ける。露骨な人種主義は、人びとの住まいを展示するにとどまらず、その上、現地の人びとをも展示するような、好評を博した演出にまで及んだ。なかでも、1878年のパリで初めて出展され、20世紀に入っても万国博覧会の標準的な展示であったカイロ通りが、最も大きな成功を収めた。カイロ通りは一方で、主にエジプト出身の250人の人びとと一緒に人気があったのはロバ追いだった一を雇うことによって、本物らしさを装った。その一方で、この通りに、ジャワ島の村が配置されたり、シャムの美術品や工芸品が展示されたりしていたことは、本物に忠実であることに中心的な関心が寄せられていたわけではなかったことを明らかにしている。1889年にストックホルムで開催された東洋学研究者の会議に出席する途上で、この展示を目にしたエジプト人研究者の一行は激怒した²⁵。

この企画に対して、エジプト政府が物質面ならびに財政面で支援していたことを知ったならば、彼らの怒りはいっそう大きくなったことであろう。カイロ通りは4年後、その他の多くの展示にまじって、中国と日本の茶館や、イングランドのパブ、スコットランドのバグパイプ演奏家、バッファロー・ビル Buffalo Bill のショーがみられたシカゴの世界コロンブス博覧会の一部として展示された²⁶。シカゴでは、アフリカ系アメリカ人の代表者に対する懸念を鎮静化するために企画された「カラード・アメリカ人の日 Colored American Day」が、人種主義的な論評を惹起した²⁷。シカゴにおけるとくに一触即発の危険な問題となっていた人種主義に加えて、とりわけ2つの領域が、1893年の世界コロンブス博覧会の来訪者の興味をかきたてた。1つは建築で、いま1つは電気であった。フレデリック・ロー・オルムステット Frederick Law Olmstedt によって選ばれたシカゴのダウンタウンの南7マイルの地に設営された、その後まもなくホワイト・シティと呼ばれることとなる、会場の建築物は論争的となり続けた。一方では、白で統一された巨大な新古典主義の建物が、視覚的な壮麗さを創出し、ジャクソン公園を訪れるほぼ全ての人に感銘を与えた。

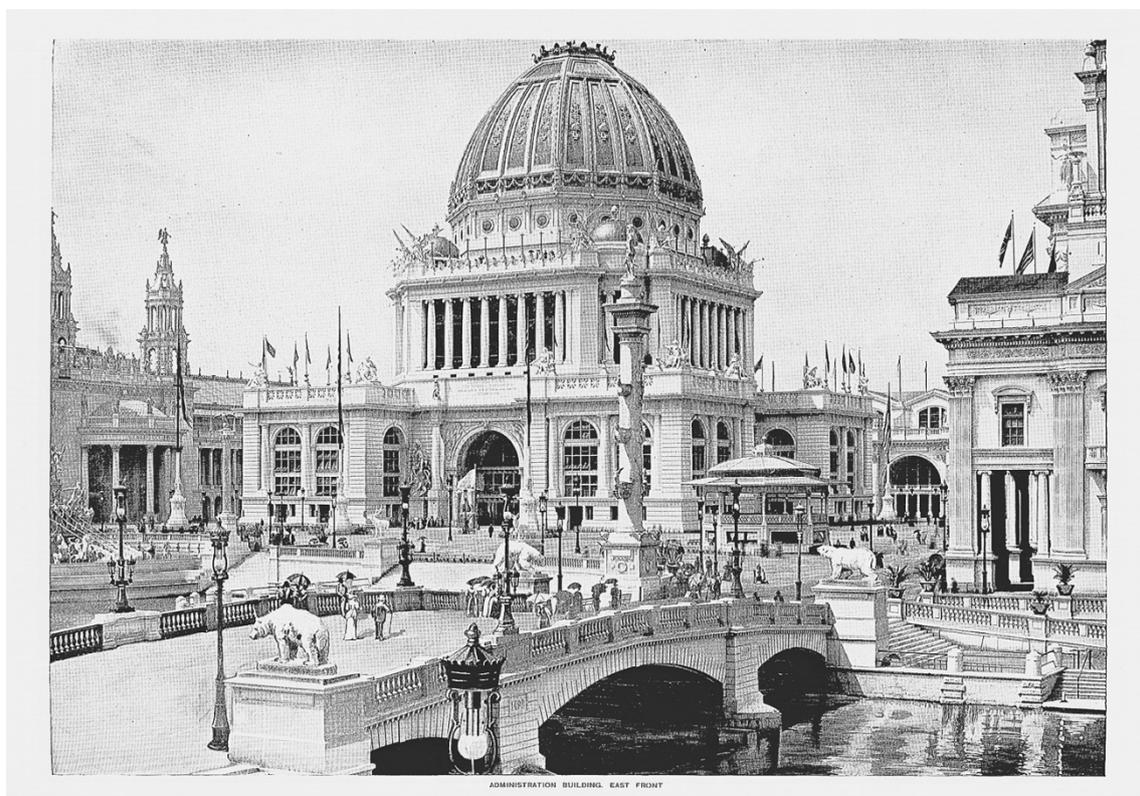
²⁴ Beat Wyss, *Bilder von der Globalisierung. Die Weltausstellung von Paris 1889*, Berlin: Insel 2010, S. 43/52; cf. *ibid.*, *passim*.

²⁵ Cf. Timothy Mitchell, “Die Welt als Ausstellung”, in: Sebastian Conrad/Shalini Randeria (eds.), *Jenseits des Eurozentrismus. Postkoloniale Perspektiven in den Geschichts- und Kulturwissenschaften*, Frankfurt a.M.: Campus 2002, S. 148-176, hier S. 148f.

²⁶ Cf. Wyss, *Bilder*, S. 193.

²⁷ Cf. Böger, *Envisioning*, pp. 139-140. 以下の叙述については、*ibid.*, pp. 109-172 を参照。

図 8 1893 年シカゴ万博の博覧会本部棟



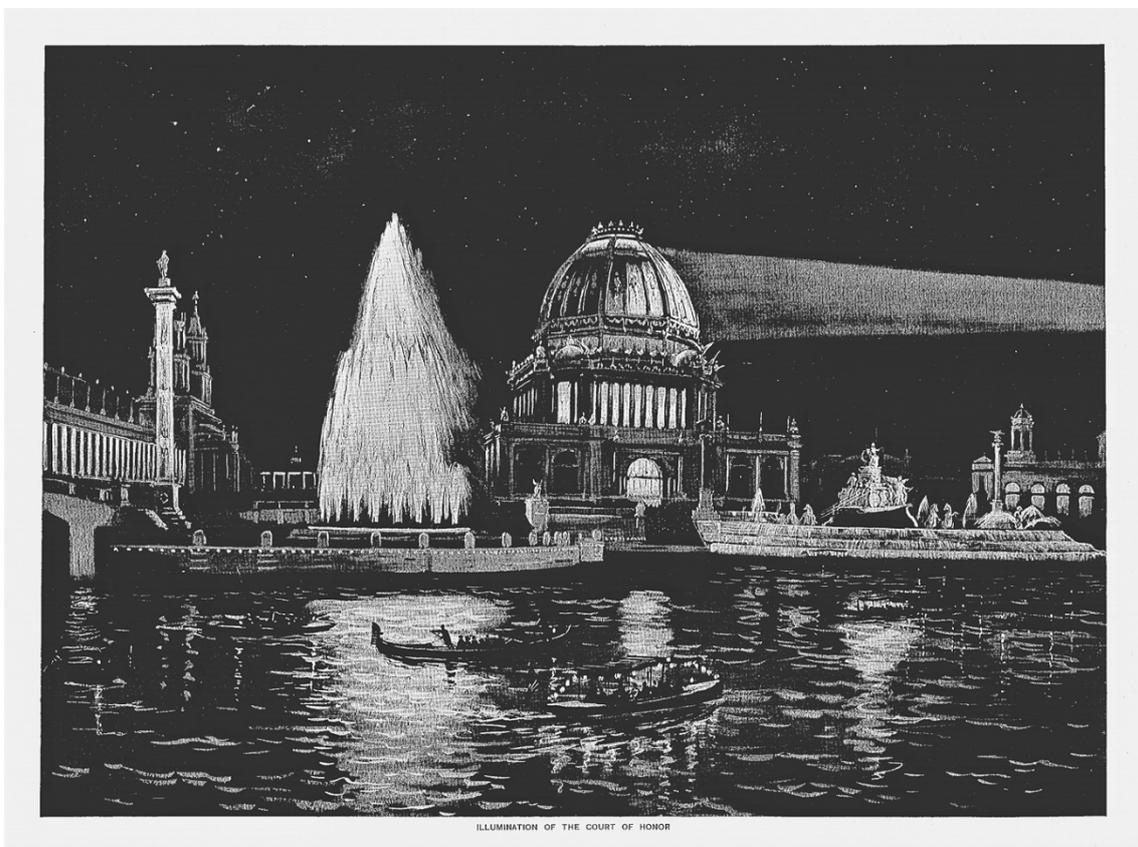
出典) 国立国会図書館ホームページ「博覧会—近代技術の展示場」より転載。

他方で、ループ Loop〔訳注：シカゴ市中心のビジネス街〕に特徴的な、モダニズム的および機能主義的な建築に類似したものを期待していた人びとは、ダニエル・バーナムのデザインに期待を裏切られることとなった。ジークフリート・ギーディオン Siegfried Giedion は重商主義的資本主義という言葉を生み出し、ヘルマン・ムテジウス Hermann Muthesius は、大部分のヨーロッパ人批評家たちの裁断を次のようにまとめた。「現代的事象の発信地であるシカゴが、博覧会ホールの鉄骨の上に、ありふれた古くさい仮面をつけるよりほかになかったということは、世界にとっての驚きだ。形成された優美な光景は恐らく魅惑的であっただろうが、このような退行的な演出は、建築の進歩にとって零点に等しい」²⁸。

退行的であれ否であれ、来訪者は〔博覧会場の様子に〕咄然とするばかりであり、とくに夜の博覧会を体験した場合はそうであった。電気と建築がこうして融合されたのであり、そして、数十万の電球は、「世界を啓蒙し、世界に恩恵を与えることとなる、新たな観念と

²⁸ Lewis, *Early Encounter*, p. 190 より引用。cf. Böger, *Envisioning*, esp. 119

図9 1893年シカゴ万博のイルミネーション



出典) 国立国会図書館ホームページ「博覧会—近代技術の展示場」より転載。

原理」²⁹を体現するものとして理解された。「シカゴは、電気のために独立した建物を充
した最初の万博ではなかったが」、電気は新たな方法で万国博覧会に大きな影響を与えるこ
ととなったのだ³⁰。光輝くイルミネーションや巨大なエジソン・タワーと並んで、いたると
ころに電動モーターが設置された。電力は、すでに7年前のパリ万博でみられた動く歩道
だけでなく、2,000人に及ぶ観客を、博覧会場を見下ろす高さ264フィートまで運び上げる
フェリス観覧車の駆動力となった。そして、この中西部のメトロポリスでは、19世紀後半
のいかなるヨーロッパ都市と比較しても、電気ははるかに重要な役割を果たしていたため、
電気の中心的役割は妥当なものであった。ここシカゴでは、電話の利用がはるかに普及し
ており、またオフィス・ビルで稼働していた無数のエレベーターは、万国博覧会の来訪者

²⁹ Böger, *Envisioning*, p. 130 より引用。

³⁰ Böger, *Envisioning*, p. 128; cf. *ibid.*, *passim*.

図 10 1893 年シカゴ万博の動く歩道



出典) 国立国会図書館ホームページ「博覧会—近代技術の展示場」より転載。

に非常に大きな感銘を与えることとなった³¹。

それはそうとして、輸送機関は重要であった。来訪者の大部分は、「ケーブルカーや、チャールズ・ヤーキズ Charles Yerkes の新しい高速『エル・トレイン El train』、もしくは、イリノイ中央鉄道会社の無蓋『家畜輸送車』の1つによって博覧会場に到着した。無蓋『家畜輸送車』は、ループと博覧会場を12分で結んだ。しかし、すべてのガイドブックが一致して認めているように、会場への最も楽しい移動手段は、湖上を走る蒸気船だった。万国博覧会蒸気船会社は25隻の蒸気船団を保有し、市中心部のドックから、25セントの運賃で乗客を〔博覧会場へ〕運んだ。乗客たちは船上で、バンドの音楽や、『世界で最も立派に建設され、最も多忙な都市の連続パノラマ』—広告の謳い文句によれば—を楽しむことが出来た」³²。こうしてシカゴでも、ジャクソン公園までのやや遠い距離が示唆していたである

³¹ Cf. Lewis, *Early Encounter*, pp. 92-93 and p. 148.

³² Böger, *Envisioning*, p. 118 より引用。ヤーキズと彼のビジネス実践については、Blair A. Rubble, *Second Metropolis. Pragmatic Pluralism in Gilded Age Chicago, Silver Age Moscow, and Meiji Osaka*, Washington, DC: Woodrow Wilson Center Press 2001, pp. 145-155 も参照。

うよりは、はるかに密接に万博と都市が結びついていたのである。輸送機関での不可欠な移動は、都市全体と、その輸送システムを展示する機会を提供した。後者の輸送システムはその後、何年にもわたり市に恩恵をもたらし、また、第1次大戦前夜の大陸ヨーロッパでは依然として未来的なものと考えられていた特徴を示していた。大陸ヨーロッパでは、

さまざまな地下鉄のシステムが1890年代より導入されたり、電化されたりし、次第に、地下鉄が大都市の需要にはより適しているということが証明されたのである。結局、世界コロンブス博覧会が、人びとに対してそれ以前のパリ万博を、「巨大な万国博覧会に隣接する、単なる田舎のお祭りのような」³³ものと思わせることに成功したか否かは、はっきりとしない。

しかしながら、媒体としての万国博覧会の未来についてゾンバルトが呈した疑問が、故なきものでないことは明らかとなった。1900年のパリ万博は、5000万人という記録的な来訪者を集めたにもかかわらず、同時代人が特別な関心を寄せた博覧会ではなかった³⁴。世紀末には、もはや万国博覧会が、近代的な発展という明確な観念とともに開催されることはなかった。それにともない、万国博覧会の媒体は分解していった。すでにシカゴでは、研究者の会議は、もはや万博の一部としてではなく、別の会場で独立した企画として開催されるようになった。そして、1900年のパリでは、初めて近代オリンピックとの共同開催が行われ、それは一度ならず繰り返されたが、それによって万国博覧会の形式が新しくなることもなかった。その上、万国博覧会における植民地問題の重要性は、ほかのどこよりも、帝国主義の列強諸国において最も大きな反響を呼んだ。それらの国々においても、両大戦間期に入ると、万国博覧会での植民地問題の扱い方は次第に批判的になっていったのである³⁵。

³³ Lewis, *Early Encounter*, p. 168 より引用。

³⁴ Cf. Geppert, *Fleeting Cities*, esp. p. 97.

³⁵ Cf. *ibid.*, p. 198ff.

図 11 1893 年シカゴ万博のフェリス観覧車



出典) 国立国会図書館ホームページ「博覧会—近代技術の展示場」より転載。

4. パリ（1937年）からローマ（1942/60年）へ

当然ながら、これらすべてが、近代の標準をめぐる議論や競争が終焉を迎えたことを意味しているわけではないし、また、そのなかにおいて近代のメトロポリスとそのインフラストラクチャーが中心的な位置を失ったということも意味しない。この点については、1935年に開業し、その記念碑的な壮大さが印象的であったモスクワの地下鉄が1つの例証となるであろう。それどころか、モダニティと優越性を求めて張り合う主張は、第1次大戦後の数十年間を特徴づけることとなる。1937年のパリ万博におけるドイツとソ連のパビリオンを収めた写真は、同万博が、イタリア的ないしドイツ的装いをしたファシズムと、スターリン主義的共産主義との間で争われたコンペとして認識されていたことを立証している。大きな相違のないこれらのパビリオンは、フランスの出品物が展示された新古典主義様式の記念碑的建築物である—1937年の万国博覧会を主催した自由民主主義が、競合し合う独裁政権に屈服することがないことを示していた—シャイヨ宮 Palais de Chaillot の左右に位置していた³⁶。これら独裁政権のなかでは、都市主義と建築という点に関して、イタリア・ファシズムが、モスクワとベルリンに対してある種のモデルを提供していた。未完に終わったソヴィエト宮殿 Palace of the Soviets の設計をしたボリス・ミハイロヴィッチ・イオフアン Boris Michailowitsch Iofan は、ローマとモスクワを結ぶ主導的な文化使節の1人であった。そして、ヒトラーの取り巻きの建築家たちは、ムッソリーニによるローマの改造と、イタリアのニュータウン建設をつぶさに学んだのである³⁷。

前者のローマ改造とは、いうまでもなく広大な空間の創造と、交通の集中化であった。それらは、単独で建てられた臨時の記念碑的建築物よりも、アルベルト・シュペアー Albert Speer をはじめとする人びとに感銘を与えた。恐らくその理由の一端は、それら記念碑的建築物が市の周縁部に建てられ、また、国民社会主義的建築に慣れてきた人びとが期待していたものよりは、はるかにモダンな外観を有していた、という事実にあったと思われる。ムッソリーニの計画は、オスマンのパリ改造に比肩し得る規模で、市中心部の解体を必要とした。最も壮大な実例が、いち早く実現された、ヴェネツィア広場とコロッセウムを結ぶ帝国通り Via Impero の開通であったことは間違いない³⁸。ムッソリーニの本営がヴェネ

³⁶ Cf. Lenger, *Metropolen*, S. 318f.

³⁷ Cf. Harald Bodenschatz, "Urbanism and Dictatorship: Expanding Spaces for Thought!", in: id./Piero Sassi/Max Welch Guerra (eds.), *Urbanism and Dictatorship. A European Perspective*, Basel: Birkhäuser 2015, pp. 15-26, here p. 16-17.

³⁸ ムッソリーニのローマ改造については、とりわけ Franz J. Bauer, *Rom im 19. und 20.*

ツィア広場にあったゆえ、この通りの開通は 2 つの目的を一度に達成することとなった。この新しい幹線道路は、レジームのプロパガンダ・ショーに必要な集団の主要通行路として建設された一方、より象徴的には、ファシスト統治を古代ローマ帝国に結びつけたのである。ムッソリーニ自身、次のように表現している。「ローマはわれわれの原点であり、参照点である。ローマはわれわれのシンボルであり、もしこう言いたいのであれば、われわれの神話である。われわれは古代ローマのイタリアを理想とする。すなわち、聡明で、力強く、規律化された、至高のイタリアを理想とするのだ」³⁹。そして、その国会議事堂は、中心軸と広大な空間を通じて印象づけることが意図された。このことは、〔ナチスの〕ゲルマニア計画において、国民社会主義ドイツの国会議事堂が、等しく壮大な南北および東西の幹線に面して、そびえ立つように計画されたのとまったく同様である。

ベルリンと同じくローマでは、レジームの自己演出は建築と都市デザインにとどまらなかった。さらに万国博覧会の誘致にも成功したのは、ローマであった。1920年代後半より〔開催地決定の〕権限を握っていた〔万国博覧会〕国際事務局は1936年後半に、新たに勃発したエチオピアに対する悲惨な戦争にもかかわらず、1941年に開催予定の万国博覧会をイタリアに委ねた。しばらくした後に、国際事務局が同博覧会の開催年繰下げに同意したため、ローマ万博 *Esposizione Universale die Roma* はファシスト支配 20 年の公式祝典としての役割をも果たすことが可能となった。ある意味でローマ万博は、1936年のオリンピックによってヒトラーが手中に収めた非常に大きな成功によって誘発された、守勢的な処置であった。ファシスト・イタリアは、1934年のサッカー世界選手権大会の開催国として、国際的な名声を獲得するための世界的なイベントを誘致する経験を有しており、第6回オリンピックの候補国に名を連ねていた。ベルリンに敗れたことは、「政治的スポーツ主義」⁴⁰として特徴づけられる政治スタイルをとっていたムッソリーニにとって打撃であった。ローマ万博は、その埋め合わせをするものと考えられた。しかしながら、その会場は市の中心部には予定されていなかった。むしろ万博会場は、ローマの拡張方向を海に向けて軌道修

Jahrhundert. Konstruktion eines Mythos, Regensburg: Pustet 2009 と Harald Bodenschatz (Hg.), *Städtebau für Mussolini. Auf der Suche nach der neuen Stadt im faschistischen Italien*, Berlin: Dom Publ. 2011 の中の各章を参照。

³⁹ Gustav Seibt, *Rom oder Tod. Der Kampf um die italienische Hauptstadt*, Berlin: Siedler 2001, S. 299 より引用。

⁴⁰ John Hoberman cited in: Eva Gajek, *Imagepolitik im olympischen Wettstreit. Die Spiele von Rom 1960 und München 1972*, Göttingen: Wallstein 2013, S. 70; cf. *ibid.*, *passim*.

正するための計画の一部となった。第 2 次大戦の勃発のため、間もなく建設工事は中断された。しかしながら、戦後になってほとんどの建物は完成した。ヴィルジリオ・テスト *Virgilio Testa* が、ムッソリーニの主任建築士であったマルセロ・ピアセンティニ *Marcello Piacentini* から〔会場設計の〕指揮を継承したが、ピアセンティニの思想がなお計画の方向性を支配した。ピアセンティニは 1937 年初頭に、ローマ万博の組織者に宛てて、次のように書いている。「フォロ・ロマーノの真ん中に立っていることを想像してみてください(…)すると、遠景には、左にコロッセウムを、右に国会議事堂を、目にすることとなるでしょう。これは古代の光景と似ています(…)しかし、近代的なのです。きわめて近代的なのです！」⁴¹

1950 年代にスポーツ競技場が追加され、会場全体が 1960 年のオリンピック会場として利用された。おのずから 2 つの結論が浮かんでくる。いくつかの点で、オリンピックは、世界的に重要なアトラクションとして、万国博覧会に取って代わることとなった。オリンピックは開催都市のインフラストラクチャーの近代化の手段として利用され続け、また万国博覧会の地位を継承し続けてきたが、他方で、初期の万国博覧会が実践したように、オリンピックが近代のメトロポリスを定義することはない。第 2 の結論は、同様に明白だ。すなわち、万国博覧会と、のちのオリンピックは、つねに、開催国に国際的評価を与える国際政治の一部であった。それは 1960 年には、建築家ピアセンティニが、万国博覧会の開催を不可能にした第 2 次大戦の終戦後に枢軸国万博 *Rassegna dell'Asse* に利用するために設計した会場において、イタリアがスポーツの国際世界に復帰することを承認する形となってあらわれた。日本と西ドイツが同様にそれぞれ 1964 年と 1972 年に、かつての枢軸国をスポーツ界にとどまらず〔国際社会への〕復帰を完全に認めるオリンピックを開催したことは、よく知られている。しかし、本稿は、国際政治のテーマに立ち入るつもりはないし、また、1964 年の東京オリンピックを、当然ながら 19 世紀後半にまでさかのぼる主要な万国博覧会の歴史に統合できるようにする意図もない。

⁴¹ Bauer, *Rom*, S. 274 より引用。この他に、Bauer, *Rom* と Bodenschatz (Hg.), *Städtebau* の各章と、Daniela Spiegel, “Urbanism in Fascist Italy: All Well and Good? ”, in: Bodenschatz/Sassi/Welch Guerra (eds.), *Urbanism*, pp. 43-58 を参照。